

使命を抱いた小鳥

今年の5月のとある朝——バーバ・ムクターナンダの誕生日の週のある朝——グルマーイがアーシュラムの窓のそばを歩いていた時、外の1羽の小鳥が目にとまりました。その鳥は、ガラス窓のすぐ外側のスレートタイルの上にいました。茶色で、頭にオレンジ色の筋が入っていて、腹には白い斑点がありました。その鳥は胸をいっぱい膨らませて、ことのほか丸々として見えました。

グルマーイがその鳥を見て、どうして羽をいっぱい膨らませてそこにいるのだろうと不思議に思っていると、ペットの猫が彼女のそばにやって来ました。

さて、この猫はその小鳥を見ると、とても興味を持ちました。

猫は鼻をガラス窓にすり寄せました。できるだけ近寄りたかったのです。

その鳥は、猫の存在には全く動じませんでした。まだ鳥は、ガラスからほんの数インチの所にいました。猫と鳥は、ほとんど鼻とくちばしを突き合わせていたと言ってもいいでしょう。

10分がたち、20分、30分がたっても、鳥は中をじっと見詰めて、その場所にいました。ただ、グルマーイと猫をずっと見て、見て、見続けていました。時々、ほんのわずかな動きをしました。初めにこちら側に、次にあちら側にと、小首をかしげてみたりしました。グルマーイをもっとよく見ようとしているかのようでした。そして、猫をよく見ようとしているようでもありました。

そうしながら、鳥は少しずつにじり寄っても来ました。グルマーイは、「私を中に入れてくれますか？ どうか窓を開けてください！」と、鳥が言っているのだろうかと思いました。

時間が過ぎるにつれて、グルマーイは、その鳥のことが心配になってきました。グルマーイは、この鳥は大丈夫なのだろうか、何か助けてあげる必要があるのではないかと思いました。

45 分間が過ぎて、グルマーイは猫に言いました。「私たちはこの鳥に、私たちがどれほど好きかを知らせるべきね」

そして、グルマーイはすぐそばにいる猫と一緒に、窓のそばにさらに近寄りました。鳥もまた、その小さくてきゃしゃなかわいらしい足で、前にすり寄って来ました。

そして彼ら——グルマーイと猫と鳥——が本当に近づくと、グルマーイは言いました。「私たちは、あなたが好きですよ」

グルマーイがそう言うや否や、鳥は窓に背を向けました。広い青空を見渡し、その羽を広げて、翼の下に風を受けながら空へと向かって一気に飛び立って行きました。

そうして鳥が楽しそうに空高く舞い上がると、グルマーイと猫は、ほれぼれとその姿を見送りました。

